

基調講演／レジюме

私の太宰治論

―鷗外につながら一つの文学系譜

熊谷 孝

レジюмеに代えて

当日、どういうことを、どういう順序で話すか、というような具体的なプログラムは、全然と書いていいぐらにまだできておりません。ばかりか、プランそのものさえ揺れに揺れております。どうしてレジюмеが書ける状態ではありません。

いけなかったのです。全国集会をひかえているのに、あっちこっちの喋り歩きの仕事を、身のほど知らずに、ごっそり引き受けてしまつて動きが取れなくなっています。それに誤算もありました。どういうわけか今度引き受けた分のは、揃いも揃って講演レジюмеを書けと、あとになってから言つてよこすのです。みんな、それぞれにテーマは違ふし、そのテーマの違ふものを平行して書き分けたりその間を縫って喋りに出かける、というようにことをやっているうちに、わが単細胞のアタマの中は紙屑みたいになり果てました。

お許しください。それでレジюмеが書けないのです。

今、私のアタマの中にあることといつたら、△鷗外につながら一つの文学系譜／私の太宰治論▽という自分のレポートに対して与えたタイトルの、ごくおおまかな趣旨と、それから、こうした視点をあらかじめ用意して参加者の方々にお聴きいただけたら、と思うような二、三の事柄だけです。お許しください、そのことを走り書きして、レジюмеに代えさせていただきます。

集会運営委員会から最初に課題されたテーマは、△鷗外の歴史小説の文学史的な位置▽というふうなものでした。が、これは大へんな課題です。この課題に対して、問題の全面にわたって過不足ない答案を書く、というようなことは、現在の近代文学史研究の状況下にあつては、おそらく誰にとつても不可能に近いことではないかと思われまふ。自分の無知を武器にした、よほどのハッター屋でもない限り、そんなの、わけはないよ、などというようなことは口にしないうらうと思ひます。

小著『太宰治』の各所で言及している鷗外論にしても、冷汗ものです。精いっぱい背伸びしてみても、あていたらく……。そこで、今度のレポートでは背伸びをするのはやめました。突っ張らないことにしました。己れの力量のほどを十分にわかまえることにして、であります。知足安分ですか、『高瀬舟』の喜助の心境、とまではまいりませんが。

視 点 (一)

知足安分——そこでどういう角度(側面)から課題に切り込むかということなのですが、自分の守備位置を離れないで、鷗外文学に目を向ける、ということをやろう、というわけなのです。何か野球の話をしてみたいで恐縮ですが、ライトなりレフトなり外野の自分の守備位置から見ている限り、自分の守備範囲の地点に向かっているらしいバッターの打った球の伸びは、最初のうちこう感じられた。それがやがて、ぐんぐん伸びて……という打球の行方を、自分の守備位置、守備範囲との関係・関連において見きわめよう、というわけなのであります。

自分の守備範囲、云々——△教養的中流下層階級者の文学系譜▽につながる作家・作品群であります。作家の自意識に即していえば芥川↓太宰、あるいは井伏↓太宰の系譜であります。

直接の自分の守備位置、云々——この場合、さし当たっては太宰治の文学をさしているわけです。そこで、△鷗外につながる一つの文学系譜／私の太宰治論▽という演題になるわけなのであります。また、ここにいる鷗外というのが、直接的には鷗外の歴史小説の世

界のことをさしているとすれば、ここにいる太宰治というのも直接的には、彼の書いた最高の傑作(かと思われる)その歴史小説『右大臣実朝』の世界をさしていることになります。

視 点 (二)

打者・打席と外野の守備位置とを結んで、守備位置から球の行方を見きわめようとするのだ、というようなことを今、申しました。そういうことを言いましたのは、鷗外の歴史小説の文学史的な役割とか位置づけということを、単に作品発表の時点における意義・役割ということにだけ限定して考えるのではなくて、文学の世代的・発展的な受け継ぎの問題として、鷗外文学への評価を樹立する足がかりを用意したい、という今の自分の思い(想念)を比喩に託しての発言でありました。

普通一般には、それは、鷗外文学なら鷗外文学の「影響」ないし「影響力」の問題なのであって、文学史的な位置づけの評価ということとは別個のオーダーの問題だ、というふうな考えられているようです。けれども、それは実は、「影響」というようなアイマイ概念にもたれかかって、アピアランスとしての文学現象を、アピアランスならぬフェノメノンとしての現象一般に解消して処理しようとするところから生じた錯誤にほかなりません。(アピアランス——それは、しばしば申してまいりましたように、受け手主体の形象的認知によってのみ、いいかえれば受け手の主体的な鑑賞体験による感動の喚起によってのみメンタリティーにアピアするところの、非物理的な現象にほかなりません。)

文学創造の歴史としての文学史、という視点・視座からしますと発展というかたちでの文学現象の生起・継起という現象は、別個の世代の別個の文学的個性による、文学的イデオロギーの発展的な受け継ぎということなのであって、Aという刺激に対してはAあるいはA'というような、A系列の反応がひき起こされる、といった、いわば物理的な刺激と反応、作用因と作用果、影響と被影響の関係としては考えられない性質の現象です。百歩ゆずって「影響」という言葉を使うとしても、そこで文学の創造（受け継ぎによる創造）の決定的な要因として考えられるのは被影響主体の主体のありようです。

早い話が、漱石はすばらしいが、鷗外には科学者は感じるが文学者を感じる面が少ない、というような人は少なくありません。鷗外研究のスペシャリストの中に、存外そういう人が少なくないようです。それとうらはらに、太宰治のように、鷗外文学に深く傾倒している半面、漱石文学に対しては文学を感じない（『女の決闘』の冒頭参照）、というような人もいるわけです。Aという刺激がA系列の反応をひき起こすとは限らないばかりか、AがAではなくてBとかCとしてその人には映って来ている、というような場合も決して例外的だとは言えないわけです。（ある意味ではそこが文学の面白ところですし、文学の授業で教師が手こずるゆえんのものでありましょう。）

そういうわけですから、さっきかりに被影響主体という言葉を使いましたが、やはりこの言葉は引っ込めましょう。影響されるとか、されないというような、これは受け身な問題ではないからです。む

しろ、それは、鑑賞主体の主体的な選択と摂取の問題なわけなのですから。その他、文学の発展的受け継ぎの問題として作品の文学史的な位置づけについて考えるうえで、やはり引っかかるのは、たとえばリッケルトふうの、繰り返さない現象としての文化現象の一回性（したがって文学・芸術の一回性）の想念です。文化現象は一回的だから個人的だというのがですが。

また、たとえば、人間の生（レーベン）の無限定な連続性を前提とした、文学のノッペラボーな連続性・永遠性を語る生哲学（解釈学）一派の想念などです。さらにまた、たとえば、文学現象のアピランクスとしての基本的な性格を見落として、文学の展開の理解に「進歩」の概念を持ち込むイデオロギー主義の見解などなどです。

視 点 (三)

文学史の現実には、リッケルトたちが考えているような、先人の仕事の成果を受け継ぐこともなしに、無から有が生まれたみたいな格好で考えられる、単に非連続的なものではありません。また、ディルタイたちの考えているような、単に連続的なものでもないわけです。で、至ってアタリマエの言いかたをしますが、そこには常に連続面と非連続面が見られるわけなのです。むしろ、連続面をベースにした両者の統一がそこに、なのであります。統一？ 弁証法的な統一という意味であります。

それから、「進歩」の概念を文学史に持ち込むイデオロギー主義云々、ということなのですが、ずっと昔に、『ドイッチェ・イデオロギー』の著者が言っております。文学・芸術の発展に「進歩」と

いう概念は適用され得ない、という意味のことを。進歩ということ
を言うのなら、それは、芸術の進歩ではなくて、「芸術の技術の進
歩」ということ以外ではない、というふうにも。

文学の世代的・発展的な受け継ぎ、という場合の「受け継ぎ」と
いうのは何を受け継ぐことなのでしょうか。たとえば、太宰治によ
る鷗外文学の受け継ぎ、という場合の「受け継ぎ」ということなの
ですけれども、それは、「冬の時代」における鷗外の文学的イデオ
ロギーを、太宰たち「暗い谷間」の世代的文学的必要と必然性にお
いて、いわば「二十世紀旗手」として発展的に受け継ぐ、というこ
と以外ではありません。それは、文学的イデオロギーないし文学的
課題を受け継ぎ、そのことでまた鷗外の世代的のプシコ・イデオロギ
ーとメンタリティーをくぐる、ということなのであります。

太宰治の鷗外文学への傾倒は、その文学的イデオロギーへの傾倒
なのであって、鷗外的旧世代のイデオロギーへの傾斜・後退を意味
するものではなかった、という、そういう文学史の事実在即した、
ゆがみない理解を自分自身に導くためにも、文学はイデオロギーで
書くものでも読むものでもない、それは文学的イデオロギーによる
アピアランスなのだ、という文芸認識論的な文学観をそこに確立す
る必要があるように思うわけなのです。

視 点 (四)

自己流のタイトルの付けかたですが、私は私自身の文芸学理論の
構造的側面として、文学史論のセクションを考え、そのセクシ
ョンの重要なパートとして、文学系譜論を考えてみております。

文学系譜論というのは、文学史の連続性と非連続性の、その連続
性の面にウェイトを置いて、そこに文学創造の発展的受け継ぎの系
譜を定位しようとするところの、側面的な、文学史論の原理論であ
り方法論なわけです。別の言いかたをしますと、不断の文学創造の
歴史を、文学系譜の展開の問題として考察しようとする研究側面
です。その原理と方法を、文学史の実証的な研究との相互規定の関
係の中で理論的現実性を持たせよう、という、そのような研究領域
です。太宰の『右大臣実朝』の成立に鷗外の歴史小説の文学史的位相
の側面を探る、という課題意識は実はこうした文学系譜論的な関心
によるものなわけなのであります。

ところで、こうした文学系譜論の必要と可能を保障しているもの
は、アピアランスとしての文学現象、作品形象のもつ未完結性・未
完了性という、その基本的性格にはかなりません。死がその人の人
生的課題の完結・完了を意味していないように、人生と共にある文
学も常に未完了のかたちで課題を残しているわけです。むしろ、世
代から世代へと継いで、読者の側に課題が残されているのです。文
学が受け手の形象的認知においてのみ実在性をもつアピアランスだ
というのは、つまりそういうことをさしているわけなのでしょう。

終わりに、ひとこと。

当日は、右の所説をベースに、文学史論としての太宰治論を遂に
不毛・不発に終わらせた、その精神分析的な太宰論について言及し
たいとおっしゃいます。むしろ、それが精神分析にはなっていない
のではないのか、というような点に触れてであります。